ことぶき「なかだより」 No.180 2017.4

発行所　日本キリスト教団　なか伝道所
〒231-0026 横浜市中区寿町 3-10-13 金岡ビル 203
Tel.（045）671-1109
振替　00200－1－47369
E-Mail : naka@church.jp　http://church.jp/naka/
発行者　堀江有里　（題字　松橋 順）

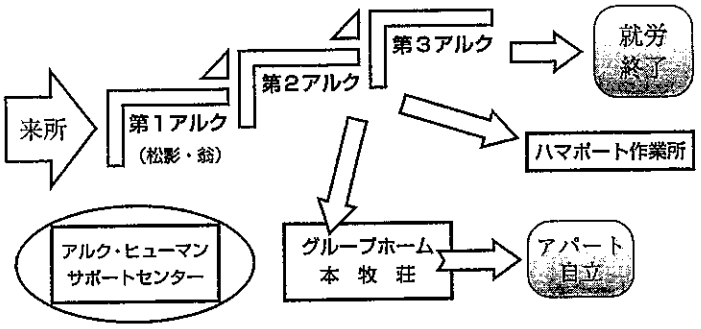
宣教方針
① 貧しい人々への福音に共にあずかる。
② 地域の問題に関わる。
③ 諸教会に呼びかけてゆく。

集会　主日礼拝　日曜日　午前 10 時 30 分より

寿アルクに支えられて

～サポートの事例から～

渡辺英俊牧師に聞く



2016 年 11 月 1 日から、第 2 アルク・デイケア・センターは「第 2 アルク生活訓練センター」となり、それに伴い、第 3 アルク・デイケア・センターは「第 2 アルク地域活動支援センター」と名称を変更しました。

「市民の会　寿アルク」は一九九二年に発足、二〇〇六年にＮＰＯ法人を取得した。渡辺牧師は、発足当初から世話人として参加、法人設立からは引退するまで副理事長を務めた。その二二年を振り返り、牧師としてアルクに関わってきたことの意味を語っていただいた。

回復のプロセス

一人のアルコール依存症の方が来所されると、まず、二つの第一アルク・デイケアセンター（「松影」か「翁」）のどちらかに行って頂き、そこで約半年間ミーティングを重ねながら、酒を飲まない生活をして、安定したら第二アルクへ上がります。そこでは新しい人間関係を作ったり、電車に乗るなどの社会的経験を積んだりしていきます。その生活も安定すると、リハビリの段階である第三アルクに進み、週何回かアルバイトをしたりして、就職準備をします。そして就労すれば修了です。しかし就労といっても、アルコールを卒業するわけではありませんので、ＡＡ（アルコール依存症者の自助グループ）のミーティングに出る習慣を身につけ、毎日続けていかなければなりません。十年飲酒しなかったとしても、ただ一度の再飲酒によって、全部元通りになってしまう非常に厳しい病気です。本人の決心とか意志の力でもって止められるものではありません。そのため、なか伝道所では、出席される依存症の方々への配慮として、愛餐式に用いるのはぶどう液です。又、毎週火曜日の夜にはＡＡのミーティングの場として集会室を利用して頂いています。

このように、昼間はアルクでサポートを受け、夜間は必ずどこかのＡＡグループのミーティングに出るという生活習慣づけの訓練をされて回復していきます。この主流の道筋の他に、二つの枝分かれの道筋があります。一つは途中でアパートを借りて自立したいという方のために、グループホーム本牧荘というものがあり、そこに入って一年間料理・洗濯・掃除など、基本的な生活の訓練を行い、自立を目指すというものです。又、寿のアルコール依存症の方は高齢者や身体障がい者が多いので、必ずしも就労で修了にはなりません。修了で放り出されることにならないように、身体が動く間は身をおくことができるようにと、ハマポート作業所に通い、そこで作業をしながら、一生涯飲まない生活を支え合っていくというのがもう一つの道筋です。

更に様々な電話相談があり、特に家族からの相談がもちこまれ始めて、そのような相談の受け皿の必要性が生まれ、アルク・ヒューマン・サポートセンターができています。ここは行政の助成の対象外のため、経済的困難がありますが、何とかみんなで支え、活動している状況です。

この約二五年間に他の六つの施設は行政の助成を受けて大きな仕事をする組織に成長しました。発足以来三二〇〇人を超える来所者があり、そのうち約五％の方が回復されました。また三カ月間通った人では五人に一人が回復されているというのは、大変高い確率と言えます。

つらい思い出

私がなか伝道所の牧師としてアルクに関わるようになったのは、前身の中村橋伝道所時代に求道されていた寿在住のＩさんとの出会いがきっかけです。この方は真面目

で熱心に礼拝に通われ、何かとお手伝い頂きましたし、よく気のつく、人あたりのやわらかい方でしたが、時々何ヶ月かぱったりと来会されなくなることが繰り返され、実はアルコール依存症のせいだったことがわかりました。アルク設立の話が出たとき、牧師としてこの人の回復のためにもと、世話人としてデイケアセンター開設の準備に参加させていただいたわけです。そして、家が借りられていよいよ始められるという段階になった時、地元の方々の猛反対にあいました。アルコール依存症に対する偏見のためでした。一年かけて説得し、開設にこぎつけましたが、その間にIさんは簡宿の部屋で孤独死されていたのです。教会に来られ真面目に求道しておられたこの人をちゃんと支えられるものが教会にはありませんでした。何の宣教かと思いました。寿での宣教はアルコール依存症のケアと切り離せない。どうしてもこれはやらなくてはいけないと強く感じました。

幸い、理事長さんは寿で長くアルコール問題に関わってこられた方ですし、スタッフにも恵まれています。回復サポートを長年続けているうちに、アルクでアルコール依存症から回復された当事者が指導員となって、後輩を指導していくという嬉しい事例が多く見られるようになり、次々に新しい施設もつくられてきたのです。

アルクがあったから

その後、教沖縄出身の伝道所メンバーOさんのご紹介で、同郷のNさんが来られるようになりました。大変礼儀正しく、律儀で真面目な方でありました。当時は足がご不自由だったので、身体障がい者のための施設をご紹介し、喜んで通所しておられました。そこにアルコール依存症回復者の方が職員をしておられ、Nさんもアルコール依存症であること気付かれ、AAに誘ってくださっていました。ところが、不自由だった足の手術に成功して退院された夜にAAのミーティングに出なかったために飲酒してしまい、隣室の住人とトラブルになって、刃物で相手を死なせるという不幸な出来事にいたりました。十一年の刑で服役中、刑務所を訪ねて面会したり、手紙のやり取りをして励ましてきました。

その十一年の間に、アルクは施設も充実し、ステップを踏んできちっと卒業できるカリキュラムが整いました。出所が近づいたとき、私が「寿に帰っておいで」とNさんに言えたのは、日本全国どこへ行こうと、これほどの回復サポート・システムが整った場所は他にはないと信じたからです。本人も「帰りたい」と言ってくださいました。それで刑期満了が近づいたとき、寿に迎える準備を始めたのです。

私たちはNさんをお迎えするにあたり、出所直後、一人でいるすきを作らないようにするため、予め保護観察所を通して刑務所と連絡をとり、出所日時を問い合わせ、中区の生活保護担当者に連絡して、帰ってこられたらすぐ生活保護を受けられるよう手配し、アルコール専門病院のケースワーカーさんに頼んで、到着翌日、朝一番で診てもらい入院できる体制を整えてました。更に退院後すぐ更生施設に入所できるように手配しておくなど、アルクが二十年間に作り上げてきたネットワークをフルに活用して準備しました。釈放の朝には、地元の団体のご厚意で車を出していただき、総勢四人で迎えにいきました。十一年の刑を受けた人を出所時に四人で迎えに来ることが、刑務所始まって以来のこととして職員に驚きの目で見られるという経験をしました。常に誰かが一緒にいる体制で横浜へ帰ってきて、区役所はその日の内に転入などの手続きを済ませ、その夜は付き添いの人を頼んでホテルに宿泊。翌朝病院で診断を受け、直ちに教育入院という形で預かって頂きました。四ヶ月後退院されてすぐ更生施設に入所、更に現在は高齢者施設に移られ、アルクの作業所へ通っておられます。そこでは飲酒するすきを作らないプログラムが組まれていますから、もう飲酒する機会はありません。Nさんへのサポートは、アルクのプログラムの外で個人的になされた支援の部分もありますが、これだけのバックがあって、万全の体制を組んで受け止められたのです。本当にアルクのおかげでできたことです。

「牧会」とは

個人の善意では背負いきれない重い問題を背負っている方々と関わる時、例えば、歴史に残る入管法という悪法の下で苦しむ外国籍の方々の問題は、私一人が背負おうとしてもできることではありません。それをみんなで背負うためには、全国のネットワークを作って、せっせと政府や国会に働きかけるようなことが必要です。同様に、一人のアルコール依存症の方がここにおられる場合、この方がどうしたら更生できるかをみんなで考え、力を合わせて行政をも動かし、回復のプログラムをきちんと作って、そこに乗せることが必要です。

もし、牧師がそれを牧会の課題として受け止めたとしても、個人的な善意や努力ではどうにもならないわけです。アルクのような社会的資源を作ることに力を注ぐことで、結果的に牧会というものが、単なる個人的な力ではなく、社会資源化されたシステムの力の助けを借りてなされることになります。そういう意味では、Nさんのケースでは、助けられたのはこちらであったと思っています。飲酒の問題を抱えた方が教会にみえた時、教会として何かサポートしなくてはなりませんが、まず「アルクに行きなさいよ。アルクという場が備えられているよ」と一こと言えるかどうかが大事なのです。そういう意味で、牧会の必須事項として、教会が問題をもった人を支えるシステム、社会的資源を作る役割を果たすべきだと考えています。

（まとめ　袴田交子）

使信

「孤独の淵から」

堀江有里

それから、イエスは弟子たちと一緒にゲツセマネという所に来て、「わたしが向こうへ行って祈っている間、ここに座っていなさい」と言われた。ペトロおよびゼベダイの子二人を伴われたが、そのとき、悲しみもだえ始められた。そして、彼らに言われた。「わたしは死ぬばかりに悲しい。ここを離れず、わたしと共に目を覚ましていなさい。」少し進んで行って、うつ伏せになり、祈って言われた。「父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願いどおりではなく、御心のままに。」それから、弟子たちのところへ戻って御覧になると、彼らは眠っていたので、ペトロに言われた。「あなたがたはこのように、わずか一時もわたしと共に目を覚ましていられなかったのか。誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい。心は燃えても、肉体は弱い。」更に、二度目に向こうへ行って祈られた。「父よ、わたしが飲まないかぎりこの杯が過ぎ去らないのでしたら、あなたの御心が行われますように。」再び戻って御覧になると、弟子たちは眠っていた。ひどく眠かったのである。そこで、彼らを離れ、また向こうへ行って、三度目も同じ言葉で祈られた。

（マタイによる福音書　二六章三六～四四節）

「復活」を待ち望む？

いま、わたしたちは受難節を過ごしています。もうすぐ「復活」の出来事がやってきます。教会のこよみによるとそういうことになっています。しかし、イエスの「復活」の出来事を祝おうとする準備が進められるなか、わたしは「ちょっと待った！」と声をかけたくなることが、しばしばあります。「復活」の出来事を先どりすることによって、イエスが死へと至った道筋をないがしろにしてしまうのではないか。当時の時代情況のなかで、徹底的に体制批判をしようとしたイエスの〈生〉の意味は、いまも、わたしたちキリスト者一人ひとりの日々のあゆみに問いを投げかけつづけているのではないでしょうか。

ゲツセマネにおける孤独

イエスは、逮捕され、十字架刑に処せられる直前、仲間を伴って、オリーブ山のゲツセマネと呼ばれていた場所に訪れます。エルサレムと平行して南北約四キロにわたる小さな山脈であるオリーブ山。少し前にイエスは仲間たちと、この山を東側から越えて、エルサレムへと入城しました（マタイ二一章一節以下）。旧約聖書においても「最後の審判」の舞台とも信じられてきたオリーブ山（ゼカリヤ書一四章四節）。イエスはその山腹にある場に仲間たちと訪れます。

この物語にみられるのは、イエスが目前の出来事を予感し、苦悩している姿です。「できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」という祈りは、間もなく、いのちが奪い去られる自分の行末へのぬっぴきならない恐怖をあらわしているとも言えるのではないでしょうか。死を目前とした恐怖です。当たり前です。生きている人は、誰も死んだことがないからです。

その姿は、力強く、人びとを率いる姿ではなく、弱々しい、いまにも崩壊しそうなイエスの姿です。しかも、ギリギリの精神状態でそこにいたにもかかわらず、信頼していたはずの人たち（マタイではペトロとゼベダイの子）はイエスにまったくよりそうことができません。悲しみ、もだえながら

えーとねえ

お父さんにおこられて。少ししょげていた友ちゃん・・・。

（小さな声で）「でも、お母さんの方がこわいんだよ。」

（幸前　友　七歳）

ら「起きていてほしい」と願うイエスの切なる声に応えることができず、眠りこけてしまうのです。理由は単純です――ひどく眠かったから（田川建三訳では「彼らの眼は重くなっていたから」）。ここには、まさにイエスがとてつもない孤独のただなかにいる様子がえがかれているわけです。

暗黒のただなかに

「降りていく」

イエスは、その後、十字架上で殺されます。栗林輝夫さんはその様子を『荊冠の神学』（新教出版社・一九九一年）のなかでつぎのように述べています。

イエスは荊冠を押しつけられて、その人間的生涯を閉じた。荊冠のイエスの受難の出来事には何の美しさもなく、イエスは絶望の叫びをあげて息絶えた。「わが神、わが神、どうして私をお見捨てになったのか」。

この叫びは「神から見捨てられた者の無念さから噴出した叫び、神がイエスをゴルゴダの丘の上に遺棄されたことへの義憤の言葉である」と栗林さんは述べます。このイエスの叫びを出発点として教会のあゆみをとらえるのであれば、「キリスト教とは、絶望的なところに立とうとする宗教なのかもしれない」と。なぜなら、「終末は未来を否定する。世はいつか滅びる。暗黒へと降りていく中で、わたしたちは神と出会う。希望はない」。しかし、「だからこそ、復活信仰が生まれてきた」と。

そこには、熊本水俣に生まれ、筑豊の炭坑労働者とともに活動していた谷川雁さんの言葉が引用されています。

〝「段々おりてゆく」よりほかないのだ。飛躍は主観的には生まれない。下部へ下部へ、根へ根へ、暗黒のみちるところへ、そこに万有の母がある。存在の原点がある。初発のエネルギーがある。〟わたしたちがいのちを与えられていること。そのいのちを育むための力をキリスト者として与えられていること。その原点に、暗黒の孤独のなかに置かれたイエスの叫びがあるのではないでしょうか。そのイエスの姿にならうとは、どのようなことかという問いが、わたしたちには突きつけられているような気がするのです。

このように迫り来る〈絶望〉の出来事は重く苦しいものであるからこそ、誰かと一緒に思考しつづけることで、問いへと近づいていく可能性も、また、与えられているのではないかと思います。

まど

▼四月より主任担任教師として招聘していただきました。「なかだより」の読者でもあった自分が、まさか牧師として赴任するとは…。なか伝道所が刻んでこられた三〇年の重みを感じつつ、教会に、地域に学ぶことを第一に考えながら歩みたいと思います。▼学生時代、突然、三森妃佐子さんをたずねて寿越冬活動に訪れたのは九〇年代初頭。大きく変化した町で人びとと出会い、現実に触れるなかで聖書を読み直すとどんな世界がひらけていくか、楽しみです。▼学生時代を過ごした京都でも多くの出会いがありました。在日朝鮮人集住地区である東九条で学んだ理不尽さへの怒り、差別と向き合う人びとの温かさ。途中で離れましたが、わたしにとって、民族差別や日韓連帯の課題、天皇制問題や部落差別など、地域と宣教の課題を考える道筋の〈原点〉です。▼ここしばらく性的少数者の相談業務、社会学研究者として大学非常勤講師や研究員などをしてきました。社会問題論やレズビアン・スタディーズが専門。最近はクィア神学（性の〈あたりまえ〉を問う神学）を模索しています。社会から排除された側、弱くされた側に立つ神を見つめつつ▼多感な一〇代を過ごした横浜を大学入学と同時に離れて三〇年。やんちゃで反発心しかなかった中高時代ですが、母校・横浜共立学園に近い教会に招いていただいたことも「奇跡」のような思いです。どうぞよろしくお願いいたします。（堀江有里）

支援献金

感謝してご報告いたします。

編集後記

帰ってくるかい？

こう問えるためにはアルクのような社会的資源を造る働きが大切。その働きは、みんながその問題を背景にしながら、どういう風に担えるかを考え合うことから始まる。重荷を背負わされた人々との連帯。（は）